

「脱炭素おおいそ町民会議」第1回会議録

1. 概要

日 時：2025年8月3日(日) 13:00～16:30

会 場：大磯町保健センター 2階研修室

参加市民：33名(欠席者:2名) 6グループを編成

情報提供者：東京大学大学院 教授 亀山 康子氏

大磯町 産業環境部 環境課 副課長 磯崎 清彦氏

全体ファシリテーター：徳田太郎(ユニベルシタスつくば/VOICE and VOTE 代表)

2. 本日の目標(ゴール)

- ・情報提供をもとに、気候変動とその対策を知る
- ・「脱炭素アクション(案)」をもとに、現状を見つめる

3. 実施概要

〈タイムスケジュール〉

時刻	内容
13:00	開会挨拶
13:10	オリエンテーション
13:30	自己紹介とウォーミングアップ
13:45	休憩
13:55	情報提供① 気候変動の基礎
14:15	情報提供② 大磯町の取組み
14:25	グループ対話①
14:35	質疑応答
14:55	休憩
15:05	情報提供③ 脱炭素アクション案
15:25	グループ対話②
15:45	個人ワーク
16:05	グループ対話③
16:10	次回に向けてのアナウンス
16:15	チェックアウト
16:25	閉会挨拶/アンケート
16:30	放課後タイム(希望者の歓談時間)
16:50	終了

(1) 開会挨拶

はじめに、大磯町長池田 東一郎氏より開会あいさつを行った。参加者および、開催に関わる方々への協力に心からの感謝の意を表した。大磯町として環境問題に力を入れて行く中で、数値として目に見えづらい脱炭素の取組みの実現に難しさを感じていることに言及した。今回の市民会議はその困難への挑戦の好機と感じ実施を決めたことを明かし、本会議を通して町民の知恵をいただき、本会議の成果を町長として政策にまとめていくことをこの場で約束すると宣言し、再度参加者への協力に感謝と期待を伝えた。

続いて、脱炭素おおいそ町民会議実行委員会 委員長 松浦 治美氏より挨拶を行った。脱炭素を政府や企業だけでなく、個人が自分事として取り組む必要があることに言及し、本会議では参加者全員でまとめた大磯らしい脱炭素アクションを発信し、町民全員で取り組むことを目指すとの本会議の方針が共有された。

(2) オリエンテーション (ユニベルシタスつくば/VOICE and VOTE 代表 徳田太郎氏、一般社団法人 環境政策対話研究所(IDEP) 代表理事 柳下 正治氏)

全体ファシリテーターの徳田太郎氏から、全6回の市民会議の趣旨の共有が行われた。本日の会議では情報提供をもとに気候変動とその対策を知り、主催者(実行委員会)から提示される「脱炭素アクション」の案を検討することが共有された。

続いて、IDEPの柳下 正治氏からおおいそ町民会議の詳細が共有された。本町民会議は、2025年度神奈川県「高校生・地域向け脱炭素普及啓発事業」の一環として、脱炭素取組主体であり主権者でもある市民・町民が主役となり町民目線で脱炭素大磯づくりを目指し議論を尽くす場である。町民会議の目標は大きく3つであり、(1) 町民による対話の結果を、町民提案としてまとめること(12月頃)、(2) 町民提案を大磯町に提出すること(1、2月頃)、(3) 町民提案を大磯町民に広く報告し、社会に発信すること(2月頃)であることを共有した。町民会議が終了後にも、本会議の経験や提案が継続し、今後の大磯町の脱炭素の施策や活動に影響を与え続けることが期待されていると言及。

また、町民会議の進め方を以下のように共有。:(1) 温暖化・脱炭素にかかわる基礎知識の学習・共有を行い、現状について理解を深め、実行委員会・事務局が取りまとめた「脱炭素アクション(案)」をヒントとし、(2) 実際に参加者が「脱炭素アクション」を実践、(3) その経験や気づきを持ち寄り、町民による脱炭素の取組みが大磯町で広く進展するためには」という視点で議論する、(5) その結果を、「町民提案」という形でとりまとめ、町に提案し、記者発表など社会に発信し、実現を目指す。

最後に、全6回の町民会議の日程と進行についての共有を行った後、事務局は町民会議への参加者の個人情報の保護・管理には徹底を期する旨を明言した。

(3) 自己紹介とウォーミングアップ

グループ内で、まず、大磯町の地図を指さしながら、「呼ばれたい名前」、「居住地域・年数」、「大磯の好きなところ」について自己紹介を行った。続いて、「案内状を受け取って、感じたこと」、「5段階で表した気候変動への関心度」を一人ずつ共有した。

(4) 情報提供① 気候変動の基礎 (東京大学大学院 教授 亀山 康子氏)

亀山康子氏より、地球温暖化について情報提供が行われた。初めに、地球の温度の上昇と二酸化炭素のかかわりについて説明がなされた。次に、温暖化対策の程度に応じた将来の気温上昇の予想データが共有された。しっかりとした温暖化対策を世界で実施し続けたと想定した一番良いシナリオでさえ、2100年までは気温は上がり続け、気温が下がるのはその後になることが予想されると言及。「今年が私たちが生きている中で一番涼しい夏になるだろう」と述べ、温暖化の深刻さを伝えた。

また、気温上昇に伴い発生する影響として、海面上昇について共有。2100年には現状の取り組みのままで70センチ程度上がるといわれているが、実際の観測ではその予想より速い速度で海面が上昇していると述べた。次に、増え続ける温室効果ガスの種類について共有があった。また、気温上昇の数値目標については、実際に目標とされていた気温上昇の数値を超ってしまったため、目標が下方修正されたことを挙げ、現状の深刻さを共有した。

続いて、気候変動と人間の対応の関係性を説明した。その中で人間ができる対応の具体策として、

CO₂を排出する活動自体を減らす「節エネ」と、CO₂量が少ない手段に代替する「代エネ」が紹介された。

最後に、日本では気候変動に対する危機感が他国に比べ低いことや、生活のなかで実践する人が多くない現状を示唆。個人の意識が変わり、それを公言していくことで、政治や企業行動を変え、結果として国としての脱炭素の意思決定を変えていくことができることに言及し、参加者の周りの人々を巻き込んでいくことも期待として伝えられた。

(5) 情報提供② 大磯町の対策 (大磯町 産業環境部 環境課 副課長 磯崎 清彦氏)

磯崎 清彦氏から、大磯町が行う環境問題に対する対策や町民の関わりについて情報提供が行われた。まず、大磯町の環境施策の流れとして、これまで大磯町が策定した施策、地域戦略について説明がなされた。

続いて、大磯町環境基本計画 5 つの基本目標の共有がなされ、その中で特に注力している目標1「地球にやさしく、気候変動に備えるまち」と目標2「豊かな自然を大切にし、多様な生物と共生するまち」について具体的な内容を共有。計画の中で行政が取り組むもの、町民が取り組むものと分けて具体的なアクションプランを定めていることにも触れた。

また、大磯町が行う、住宅用スマートエネルギー設備導入費補助金についての共有があった。中でも現在、太陽光パネル、リチウムイオン蓄電の申請が多くみられると述べた。

公共施設の省エネ及び再エネ化の取組みについて、道路街路灯及び公園照明灯の LED 化および、公共 17 施設に対し再生可能エネルギー 100 パーセント電力を導入したことを共有した。

続いて、大磯町の地勢については、町の7割近くが丘陵部であり、現在は人の手があまり入らなくなっこことによる獣害や荒れた森林の増加が課題となっていた。そこで、町民主導のコミュニティによる水辺と緑地の保全、活用を推進。具体的には森の再生に知見のある専門家を招き、森林のあれる原因と手入れの手法を学ぶ講習会を開催。住民自らが環境改善に取り組むことのできるきっかけづくりを行っている。

そのような地域課題を解決するために始めたいくつもの町民主導の取組みが、課題の解決だけでなく地域コミュニティの活性化など新しい価値やつながりを生んでいることに触れ、本会議においても、脱炭素の取組みの中で、より豊かな暮らしにつながるような「私たちの暮らしのものをどう育てていくか」という意識を持って参加いただけたらと期待を述べた。

(6) グループ対話 ①

情報共有を受け、グループ内の2~3人で、「発見したこと・大切だと思ったこと」など感想を出し合い、その後グループ全体で、「分からなかったこと・もう少し聞きたかったこと」など質問を共有した。

(7) 質疑応答

グループ対話で共有された質問の中から各グループで 1 つ程度質問を選び、専門家へ質問した。質疑応答の概要は次のとおりである。回答は、亀山氏、及び磯崎氏が担当した。なお、時間の都合で回答できなかった質問や絞り込みから外れた質問については、後日回答することとした。

質問1: 森林と太陽光パネルの設置では、どちらが効果があるのか。

回答(亀山氏): 森林は伸びている間は光合成を行い CO₂ を吸収するが、成長しきってしまうとそれ以上は CO₂ を吸収しない性質がある。そのため温暖化対策のことだけを考えと言えば、その木を切り、空いた場所に若い苗木を植えることをしなければ対策にはならない。しかし、森林は温暖化対策以外の重要な役割も果たしている。土砂崩れ防止、生物多様性の保護など。そのため、どのような森林かによって判断する部分ではある。

結論としては、まずは太陽光パネルを設置できる建物の屋上等の適地が多くあるため、そこにパネルを設置していくことがよいだろう。

質問2:日本の温室効果ガスの9割が化石燃料の燃焼から出るものと説明があったが、その9割の内訳と残りの1割について知りたい。

回答(亀山氏):残りの1割の中には、セメントを作る過程で出てしまうCO₂や、また冷蔵庫やエアコンに使用されることのある温室効果ガスの一つであるフロン等が含まれる。

質問3:なぜこの3,4年になるまで気温上昇の問題がでてこなかったのか。

回答(亀山氏):科学者は40年ほど前からこの気温上昇を予測して伝え続けていた。国際社会も1992年に温暖化対策の条約が締結されるなど30年以上前から取組みを開始してきている。日本政府も同様である。

しかし、一般には、「気温が1度上がる」と警鐘を鳴らしても、「たった1度」とあまり深刻に受け取られなかった。科学者等は言い続けていたが、関心を持ってもらえないで行動変化になかなかつながらなかったと考える。

質問4:大磯町のCO₂削減の取組みを知りたい。

平成25年二酸化炭素排出量14万7000トン。2050年までにそれを0にしようという目標でやっているが、中間目標として-46%。最新は令和3年度の二酸化炭素排出量11万6000トン(-21パーセント)比較的目標の数値に向かっているといえるデータとなっている

質問5:植林の取組みっていうのがあまり表に出てこないのはなぜか」というもの。

植林当の森林整備はCO₂を吸収・固定化する能力を持ち、吸収源対策という。ただ日本における吸収源対策の効果を定量的にみると、2019年度の実績を見ると、温室効果ガスの総排出量の3.3%程度であることに留意する必要がある。まず排出そのものを削減する対策の強化が急務である。

(8) 情報提供③:脱炭素アクション案(一般社団法人環境政策対話研究所(IDEP)柳下正治氏)

柳下正治氏より、脱炭素社会づくりにむけた日常の中での実践の例である「脱炭素アクション(案)」について説明がなされた。本会議の最終的な目的は、大磯町で解決すべき脱炭素に関連する課題について深い対話をを行い、町民提案をまとめることはあるが、その前段階として参加者には「脱炭素アクション(案)」をまず生活者・消費者の立場で体験する機会を第2回会議後に設けていると伝えた。

この「脱炭素アクション(案)」は国立環境研究所と地球環境戦略研究機関(IGES)が提示しているもの及び、大磯町が2023年度策定の地球温暖化対策実行計画(環境基本計画の一部)の中で、「町民に期待する脱炭素行動」として提示しているものを基に、町民による日常生活等での脱炭素行動を実行委員会・事務局が25項目に整理したものである。

今回は参加者の皆様はその案に目を通し、4段階による自己点検を行っていただき、また町民脱炭素行動として追加すべきものがあれば指摘いただきたい。この結果を踏まえ脱炭素アクション案を再構成し、第2回町民会議にて説明を行った後に、その実践を参加町民に分担実施していただく。実践は8月下旬~9月10日までの10日間とし、各参加者が「脱炭素アクション(案)」のうち3項目ほどを実践・体験し、その経験については、事務局による整理分析も含めて、第3回会議で共有し、深い対話へとつなげていく予定である、と述べた。

なお、「脱炭素アクション(案)」は、脱炭素行動を大きく4つの分野で構成される(下記の表参照)。

分野	CO ₂ の排出	項目数	事例
住まい	・暖冷房、照明、料理、入浴、 ・その他家電製品の利用等	7	・屋根への太陽光パネルの設置 ・住宅の断熱性能の向上

			<ul style="list-style-type: none"> 省エネ家電等への買い替え 省エネ行動
消費	<ul style="list-style-type: none"> 製品・サービスの購入・利用・廃棄等に伴う間接的な排出 食材の購入・廃棄等に伴う間接的排出 	8	<ul style="list-style-type: none"> CO₂の低排出の商品の選択 使い捨てプラスチックの削減 資源循環の推進 旬産・旬消・地産・地消 食品ロスの削減
移動	<ul style="list-style-type: none"> 自動車(ガソリン車、ディーゼル車)の走行 	6	<ul style="list-style-type: none"> EV等の脱炭素・低炭素車への転換 公共交通の利用促進、歩歩・自転車の利用 働き方、暮らし方等の改善で、移動量を減らす
吸収源	<ul style="list-style-type: none"> CO₂を光合成によって吸収し、固定化 	4	<ul style="list-style-type: none"> 持続可能な森林管理・利用、バイオマス資源の活用、ブルーカーボン対策

(9)グループ対話 ②

グループで、「脱炭素アクション(案)」への理解を深めるために、「感じたこと・考えたこと」を話し合い、付箋に書き、共有した。次に、「脱炭素社会づくりに向けて、他に重要なアクションはないか」という観点でアイディアを出し、付箋に書き、共有した。

(10)個人ワーク

個人ワークとして参加者各自が「脱炭素アクション(案)」の各アクションにつき、自分の現時点での取り組み状況を以下4段階で自己評価し、用紙に記入した。

A: すでに習慣になっている

B: 時々取り入れているが、継続するのは大変だ

C: 機会があれば挑戦してみたい

D: 行動に移すのは難しそうだ

(11)グループ対話 ③

グループ対話では、個人ワークでの自己評価の結果を共有した。グループの中での取り組み状況の違いについて着目しながらそれぞれのアクションの難易度やその要因等について話し合った。なお、グループファシリテーターは、グループの各参加者が用紙に記入した4段階の自己評価の結果について、グループ内の集計を行った。

(9)次回に向けてのアナウンス

第2回は、8月24日(日)13:00~16:30、大磯町保健センター研修室での開催と告知があった。

(11)チェックアウト

グループ内で、今日一日の会議の感想等について共有を行った。

(12)閉会挨拶 / (神奈川県 環境農政局 脱炭素戦略本部 室長 龍江 義如氏)

最後に、龍江 義如氏より閉会挨拶を行った。神奈川県では、温暖化対策を喫緊の課題ととらえていると述べるとともに、「この10年間の我々の選択が、今後数千年先まで影響を及ぼす」という科学者からの言葉を引用し、まさに今が温暖化対策に本腰を入れなければいけない時であるという緊急性を再確認した。最後に改めて町民会議の参加町民と会議にかかる各関係者に心からの感謝を述べ、閉会挨拶とした。

(13)アンケート

参加者は、第1回の会議を終えた感想をアンケートに記入し提出した。

(13)放課後タイム(希望者の歓談時間)

終了後から 16:50 までを会場内での歓談可能時間とした。